

西欧中世都市研究の動向に関する一考察

著者	田中 俊之
雑誌名	北陸史学
巻	48
ページ	1-19
発行年	1999-12-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/3671

西欧中世都市研究の動向に関する一考察

田 中 俊 之

一 問題意識

一九九〇年代後半の日本において、ヨーロッパの歴史、とりわけ中世史を概観する新しい叙述が続々と現れた¹⁾。

それは今世紀における内外の研究成果をふまえた総括の試みといつてもいいだろう。研究の進展が、テーマや関心の拡がりとともに、それまでの認識に大きな前進をもたらしたことは明らかである。とくにいくつかの分野においては大きな書き換え、パラダイムの転換が見られる。

それが顕著に現れた分野の一つが中世都市史である。今世紀、西欧中世都市研究ほどさかんに研究され、多大な成果を生みだした分野はない。そこでは、都市とは何か、都市をどのような存在として位置づけるのがまず問われ、それを、自由・自治を一つの指標として、都市をとりまく農村との比較から考察することを出発点としてきた。しか

し時間の推移とともに研究の方向にも変化が見られ、今日まで、都市と農村の関係をめぐる通説的理解を徹底的に見なおすことによつて、これまで所与の前提とされてきた事柄にも再検討を促すような多くの論点が、芽づる式に導き出されてきたといつてよい。その結果、従来より認識されてきた都市形成・発展の構成要因に、重心の移動が見られたのである。たとえば、遠隔地商業から在地商業へ、大都市から中小都市へ、共同体から領主制へといった具合にある。

中世都市研究の日進月歩の成果を回顧し、今後の研究の指針を示す論考は日本でもすでにたびたび書かれてきた²⁾。それらはいずれもその時点での研究の現状を的確に把握し、将来的な展望へとつながるにふさわしい評価をくだすものであった。欧米における新しい研究を積極的に摂取し、それを精力的に紹介することによつて、従来との認識の相違を

明確にし、研究者に新たに共有されるべき基盤を提示したのである。そのことは大いに評価されるべきである。しかし、どのような視角から都市を捉えるのかによって、研究動向のもつ意義は異なる。今日、中世都市研究に枠組みの転換をもたらしたのは、主として全欧を視野に入れた経済史的観点からのアプローチによるところが大きい。そこには、都市と農村を含めた地域の全体構造のなかでの把握がなされたという意義がある。しかし他方、ドイツ史を専攻する立場からは、ドイツ中世の複雑な情勢およびその構造的背景への位置づけが見えにくいのではないかという印象も否めない。それは、全欧的視野からはある意味で逸脱するような、ドイツの国制に関わる固有の問題がそこに含まれているからであろう。西欧中世都市研究の動向をここであらためてふりかえって整理しておきたいと思ったのは、現在の研究の方向性をドイツ中世の構造的な背景に位置づけようとした場合に出てくる問題点を確認し、さらに筆者が志向する都市の社会史研究との接点を探りたいと念ずるからである。

本稿でも議論の対象とするのは、中世都市を考えるさいの重要な指標であった自由・自治、その基盤とされてきた共同体、および大都市というものを、どのように位置

づけるのかという点に関してである。西欧中世都市研究の発展のなかで、それらの位置づけはどのように変化したのか。そこから、ドイツ中世都市を考察するうえでの問題点を析出し、今後の展望を記したい。

二 中世都市研究の段階的発展

一九世紀以来の歴史学において、「都市」という概念はまず第一に「農村」の対立概念であった。都市は農村の封建的性格に対して、自由と自治を謳歌する非封建的性格をもつもの、都市は農村にない特殊な経済活動、政治体制、生活様式、文化をもつものとして理解されてきた。そのことが、都市に農村とは異なるものを見いだそうとする視点をおのずから設定してきたといつてよい。今世紀における中世都市研究の潮流は、以下の諸段階に区分できる。

(1) 「第一段階」

まずは、ヨーロッパ資本主義、近代合理主義の成立の前提として中世都市を捉えたマックス・ヴェーバーからの、その普遍的・社会学的にすぎる研究を、ある程度実証的に継承・発展させたアンリ・ピレンヌ、ハンス・ブラーニッツへとという系譜である。ヴェーバーは、西欧中世都市は歴

史的には自由のための全市民の誓約団体という形で出現し、近代ヨーロッパ特有の市民意識の形成の場になったとする、いわゆる自由都市論を提示した³⁾。彼はまず、都市を非農業的集落、商工業者の市場集落と規定したうえで、南ヨーロッパ都市を古代的都市あるいは門閥都市、アルプス以北の北ヨーロッパ都市を平民都市と特徴づけ、後者については、いわゆるツンプト革命によって、経済的意味での市民階級がはじめて支配を掌握、あるいは支配に参加したと位置づけた。ヴェーバーの理論は、近代国民国家の萌芽を中世に見いだそうとした一九世紀歴史学の姿勢・方法を継承し、総括したものといつてよい。

中世都市の成立に関する議論を今日的なレベルに引きあげたのは、いうまでもなく、一九二〇年代のビレンヌ、一九四〇年代のブラーニッツである⁴⁾。彼らは都市の形成を導いた主体は何かという観点から、遠隔地商人主導説を展開した。それによれば、中世都市形成の原動力となったのは一一世紀以降の遠隔地商業の発展、いわゆる商業ルネサンスであり、主要な都市は遠隔地商人層の主導のもとに発展した。都市領土の支配下にあった古い都市的集落・施設の外に遠隔地商人の定住地が成立し、商人ギルドを中心とした新定住地の住民が、やがて囲壁内の住民を含めた全体

的な誓約共同体を形成し、領土支配に対抗してさまざまな自由と自治権を獲得した。こうして中世都市は革命的な意義をもって法的な自治制度を備えた自律的共同体として成長し、周辺の領土制社会とは際立った対照をなすに至った。要するに、商業ルネサンスとともに身分的に自由な遠隔地商人の主導によって形成された都市的集落、周辺農村の領主権力からは自立した、住民どうしの誓約に基づく法的な共同空間(共同体)、水平的・市民的な自由・自治の空間、これらを中世都市の本質としてビレンヌ・ブラーニッツ説は示したのである。これが中世都市に関する通説的理解(古典学説)となった。

こうした理解は日本では、近代市民精神の源流をとくに北ヨーロッパの中世都市の市民意識のなかに探ろうとする増田四郎氏によって受容された⁵⁾。以上を「第一段階」としよう。

(2) 「第二段階」

これに対し「第二段階」は、ビレンヌ・ブラーニッツ説批判の初期形態と位置づけられるであろう。その基本的な立場は、中世都市の形成を促した原動力を西欧封建社会の構造のなかに求めなければならないとするものである。一

九五〇年代以降、エディト・エンネンは、ピレンヌ・ブラーニツ説の一部を継承し、都市形成における共同体的な性格、都市住民による共同性を強調する一方で、都市ないし農村領主のイニシヤティヴをも軽視してはならないと説いた⁶⁶。それによれば、都市領主支配の時代にすでに都市は地域共同体として画定され、自治も少しずつ発展していったのであり、誓約共同体運動はその一つの仕上げ段階にすぎなかった。すなわち、都市の成立・発展の要因を都市内の構成要員のみによる自律性に求める議論は不十分であり、構成員による仲間団体的なゲノツセンシャフトの要素と、領主権力による支配契機に基づくヘルシャフトの要素、この双方を視野に入れる必要があると指摘したのである。こうして、都市と農村とを包みこんだ地域単位での構造把握がめざされるようになり、農村(非自由)からの自立を都市(自由)の存在根拠とする通説の骨子が批判にさらされた。

エンネンの見解は、領主権力が市民かという二者択一でなく、市民の発展に都市領主が対応する形で地域共同体としての都市共同体の基盤が形成されていくという、より現実的なプロセスを認識しようとするものである。封建社会のなかに都市を位置づけるといふ視点、領主権力の発展との関わりにおいて都市成立の過程を捉える視点が、この時

期すでにエンネンによって引きだされたといつてよいだろう⁶⁷。

そうしたなかで一九六〇年代末以降、クヌート・シュルツは、ライン諸都市をおもな研究対象として、都市共同体の形成・発展に指導的役割を担ったのは、従来、領主役人(家人)かつ非自由身分と考えられていたミニステリアールン層であつたとするミニステリアールン主導説を展開し、遠隔地商人主導説を批判した⁶⁸。それによれば、ミニステリアールンが都市共同体の指導層たりえた根拠は都市領主権との結びつきであつた。しかしそれは領主権力への従属を意味するのではなく、領主への勤務提供者として、逆に共同体内部における特権的地位を基礎づけることになつたという。また下級貴族化、封建領主化した一部のミニステリアールン(騎士的ミニステリアールン)とは異なり、都市において在地的な商業活動にも従事していた一部のミニステリアールンは、有力市民家系との婚姻をつうじて市民化することによつて(市民的ミニステリアールン)、よりいっそう市民との利害を共有することになつたというのである。シュルツ説を契機に、それ以降のドイツではミニステリアールン研究がさかんになった。そこではシュルツ説の当否とともに、ミニステリアールンと都市との関係について

活発に議論がなされた^⑩。シュルツ説は批判的検討をへて、ミニステリアーレンを内包した都市の封建的位置づけという点から評価されるに至ったが^⑪、この段階でのシュルツの理解では、ミニステリアーレンは遠隔地商人に代わるゲノッセンシャフトの主体にすぎず、ヘルシャフトの影響は希薄である。しかしいずれにせよ、領主権力の一翼を担う社会層としてこれまで都市世界にとっては異物的存在とたたづけられてきたミニステリアーレンに光があてられたことによって、封建社会と都市、領主権力と市民の接点が積極的に探られるようになったといえよう。

しかし「第二段階」は総じて、通説批判の初期形態にとどまる。それは、この段階での研究が、エンネンをも含め、都市制度の研究の域を出ないことに加え、シュルツ説にも見られるように、いまだ部分的には、一方で都市を封建社会の構成要素として位置づけようとしながらも、他方で都市の自由と自治におお市民の共同体的・革命的性格を見ようとしている点で、都市を封建社会の構成要素として位置づけようとする認識に曖昧さを残しているといえるからである。

(3) 「第三段階」

さて、一九七〇年代以降の研究の特徴は、多様な研究方向をとりながらも、総じてヘルシャフトの影響力を検出しようとしたこと、それによってエンネンの主張をさらに推し進め、通説批判をより鮮明に示した点にある。ドイツ、フランス、ベルギーなどを中心とする研究の新たな展開において、日本の学界においても森本芳樹氏、田北廣道氏らによって、都市・農村関係の再検討という課題のもとに、経済史の観点から西欧中世都市像の見直し作業が積極的に進められてきたことは周知のとおりである^⑫。

そこではまず、地理学における中心地理論の影響をうけて、都市概念の柔軟化がはかられた^⑬。それは、遠隔地商業を中心に成長した自由・自治の拠点としての大都市をモデルとせず、一定地域において何らかの中心的機能をもつ定住地を都市と認めることにより、都市と農村を包含する地域内の経済的な連続的序列を想定することを可能にした。そこから、都市の形成・発展をより在地的に把握しようとする方向が導かれることとなった。都市と農村の緊密な交流、相互依存関係を検出することにより、遠隔地商業を唯一の要件とはしない多数の都市が検出されたのである。ここから、従来看過されてきた中小都市の重要性が喚起

された。一四世紀初頭において人口一万以上の大都市の数はおよそ五〇にすぎず、中世都市の大多数を占めたのは圧倒的に中小都市であった。都市の重要性はその規模ではなく、在地における機能だという。そしてそれを地域という枠内での階層構造に位置づけた場合、頂点部の人口数万、国際的な商業圏と輸出工業で繁栄する大都市から、底辺部の人口数千前後、日常生活物資を取引する小市場圏をもつ小都市や農村まで、遠隔地交易と在地的交換とが互いに絡みあって結合するような流通の構造、経済ネットワークの展開が示される。このように、中小都市への着目は在地的な発展を基盤とした地域内の共存の形態を明らかにしたのである。

このような中小都市を結節点とする都市と農村の相互依存の持つ在地的な経済交流の検出をつうじて、都市の成立と展開における領主の積極的な役割が注目を集めるようになった。都市と農村の動静は、領域支配をおこなう領主の主導に大きく依存しており、領主自身が利害に基づいて商品交換、貨幣流通、そして安全の確保、保護を積極的に促進していたのである。こうして、都市は領主の主導のもとで領主権力に支えられて存在していたと強調されるようになった。また、一三、一四世紀を中心に領主によつ

て都市建設や商工業者の誘致が積極的に進められたことを含め、都市形成・発展における領主制的な影響を評価する主張が優勢となった。

領主制説の優位はさらに、共同体や自由・自治への評価にも再検討を促すこととなった。すなわち、ピレンヌやブラーニッツが強調したような共同体の水平的な結合を核とするよりもむしろ、領主制的色彩のきわめて強い都市像が浮上したことによって、中世都市の自由・自治は、従来のような下から獲得する革命的な性格ではなく、領主との保護・奉仕関係のなかでの権威への従属、および上から授与される特権と理解されたのである。ここでもまた中世都市の封建的性格が強調される。発達した自治機関の存在が都市の要件ではないと考えられたのである。いわゆるコミュニケーション運動という形で現れるような共同体のありかたも、一二世紀の北フランスからライン地方にかけての特定地域に限定されるのであり、中世都市を代表するものではないというのである。確かに領主と共同体のあいだの紛争は頻繁に生じたが、多くの都市で、領主権力と共同体は対峙するものではなく、あくまで領主制の枠内で共同体は利害を調整し、双方の合意や妥協によって一定程度の自治が確立されたと理解されるようになったのである^①。

「第三段階」で示された動向は、ヘルシャフトの要素を前面に押したすことによつて、「第二段階」での曖昧さを解消したといえる。都市か農村かの二者択一論を排除することにより、地域レベルでの複合的かつ重層的な諸関係の解明に道筋をつけ、従来とは異なる中世都市像を提示することに成功したことは、大きな成果といえよう。そこにはすでに、近代的な市民精神の源流を求める視角が割りこむ余地はない。西欧中世都市研究への視角は、多様な領域において、横よりも縦の関係、水平的よりは垂直的な結合、連帯よりは支配の組織が重視されるようになり、市民の水平的な関係、ゲノツセンシャフトのありかたよりも、領主制的な構成要因、ヘルシャフトの局面を強く意識するようになったのである。その結果、あたかもビレンヌやブラーニツツの見解(古典学説)は解体、批判しつくされて、もはや顧みる必要もなくなったかのような印象すら与えた¹³⁾。しかし今世紀後半の西欧中世都市研究のめざましい発展は、一定地域内の経済的な階層構造の指摘にもすでに示されたように、自治都市としての地位を築きえた大都市と、領主権力に依存して強固な自治組織を形成しなかった、あるいは制限された中小都市とを、地域という枠のなかに位置づ

けることで、むしろ古典学説との共存を可能にしたと見るべきであろう。その意味で、古典学説と近年の研究成果とは排他的であるとはいえない。したがって古典学説の存在意義は、留保つきではあるが、あらためて確認・評価されなければならぬと思われる¹⁴⁾。

また、共同体の役割という点については、江川温氏による最近年のいくつかの概観に、共同体と自治のありかたを部分的に再評価しようとする動きを見てとれる¹⁵⁾。おそらく、スーザン・レナルズが一九八〇年代半ばの著作において中世社会を共同体的性格によつて特徴づけようとしたことから、大きな刺激・影響をうけて書かれたのであろう¹⁶⁾。そこでは、都市民のなかに、周辺の農村世界とは異質であるとの自己意識に基づく強い共同体意識が形成されたことや、政治的な独立および自治機関の発達の程度が低い都市においてすら、防衛や治安維持などの任務が都市民の自主的運営に委ねられていたことが示唆されている。もちろんこうした指摘は古典学説への逆行を意味しない。共同体と自治の問題を、あくまで支配・従属関係との相互関係において捉えるべきであることが前提とされている。領主制優位の方向を強調しすぎた一部の研究者の見解を、振れすぎた振り子をもとにもどすように、微調整したものといえよ

う。もっともその意義については、「領主制という枠組みの普遍的性格を認め、そのなかでの、あるいはそれに対抗しての民衆の活動を評価する余地を十分にもっているのが、今日の領主制説の特徴」であるという、森本芳樹氏の寛容なコメントに言いつくされているともいえるが¹⁸。

このように、中世都市について、封建的諸関係から自立した共同体社会というイメージが後退し、領主の主導性に基づく縦の支配関係が強調されるなかで、ここ数年、禁欲的ではあるが、都市が共同体としてもつ性格を、あくまで「第三段階」で共通了解とされた認識をふまえて評価しようとする姿勢が見られる。「第三段階」の研究成果が領主制的な構成要因を強調するあまり、自由・自治のための共同体運動の主體的な意味、あるいは共同体的な価値観の浸透といった側面が過小評価されたとの印象は拭えない。しかしそこにはなお、共同体の主体性や価値観の浸透を、領主権力との微妙な絡み合いに留意する必要があるにせよ、積極的に評価しうる余地が残されているであろう¹⁹。それらの検討が今後、議論をさらに前進させることになると思われる。

三 ドイツ史から見た大都市、共同体の意義

前章で見たように、近年の西欧中世都市研究が重視するのは、大都市よりもむしろ中小都市である。これは大都市に偏った従来の都市論の修正であると同時に、地域を視野に入れた全体的な構造把握の帰結であった。経済史的な観点によれば、地域の枠内では、領主支配下にあつて自治を発達させることのなかった中小都市のほうが、発達した自治組織をもち自治都市共同体として存在しえた大都市よりも、数のうえで優勢であつたばかりか、地域経済の機能面でも重要であつた。しかし都市としての重要性は、数の優劣や経済的機能のみで決まるものもあるまい。むしろ背景となる政治的情勢をも含めて検討する必要がある。中世都市研究の全体的な動向は、ドイツ史の側からはどのように評価できるのであろうか。

まず中小都市の重要性については、ドイツ国制史の立場からも指摘がなされている。ドイツ中世の政治動向からの説明という点で有益な論点を提示しているのが服部良久氏の論考である²⁰。服部氏は、一九七〇年代後半にすでに、都市を含めた封建社会の構造的特質の解明という課題認識に基づいて、国制史研究の観点から中小都市研究の意義を

強調、アプローチを試みた。国制史的観点による都市史の位置づけとはどのようなものか。以下、論点を整理してみよう。

一〇〜一二世紀のドイツ(神聖ローマ帝国)では、ザクセン、ザーリア王朝の皇帝によるレガリア(国王の高権)の行使、すなわち、形成期の遠隔地商人集落に築城権、市場開設権、関税権、商人保護権などの特権付与を積極的におこなうことによって、都市化が促進された。都市の成立に大きな影響力を有したのは、まずもってこの国王高権であり、帝国全土におけるこうした政策が、市民と王権とを一時期的にはあれ結びつけることに成功した。こうして都市は帝国全体の支配拠点として認識され、皇帝Ⅱ国王にとつて都市政策が帝国平和のための中心課題となった。

しかし叙任権闘争をへて一二世紀以降、帝国政策としての都市政策は、自己の領域支配の確立をめざす聖俗有力諸侯によって牽制される²⁾。帝国全体に対する国王高権の後退とともに、シュタウフェン王朝以降は、王領・家領強化政策としての都市政策が展開されるようになった。フリードリヒ一世は家領拡大・強化政策として多くの中小都市を建設、自治を制限することによって有効な支配拠点としたのである。しかし一三世紀以降、それはさまざまなレガ-

リア、罰令権、裁判高権を獲得した有力諸侯たちによって模倣・継承され、大規模な都市建設ラッシュが到来した。一二〇年頃、ツェーリングゲン家によって西南ドイツに建設されたフライブルク・イム・ブライスガウはその先駆である。こうして、都市建設および都市政策は、帝国政策レベルから領邦政策レベルへと重心を移したことになる。こうした領邦諸侯の都市政策をもふまえるなら、中世後期の王権、諸侯、都市の相互関係については、従来のような王権・都市と諸侯の対抗図式ではなく、王権・都市と諸侯・都市の対抗図式によって、ドイツ国制史への動態的なアプローチが可能になるといえるのである³⁾。

国制史的立場からのこうした見解は、ドイツ中世の構造的背景をふまえることによって、封建社会のなかの都市という枠組みに一定の奥行きを与えているといえよう。もちろんここでは、有力諸侯が、国王高権に関わらない地方的な市場集落を建設することにより、支配領域の内部で完結した日常的な近隣相互の市場交易を促進・統御し、領邦経済の基礎をおこうとしたということにも目配りがなされており、都市の経済機能と領主権力の相互の規定性をふまえることの意義は十分に認識されている。また、中世盛期の都市を王権、諸侯の領域政策のなかに位置づけたことによ

り、中世後期以降のドイツ国制史、社会史のダイナミズムに道筋をつけたと評価できよう。

しかし、中世盛期以降のドイツにおける諸侯の領域政策を念頭におくなら、都市の重要性は同時に、自己の支配領域として都市領邦を形成した帝国都市にも求められなくてはならない。帝国都市とは、中世後期に皇帝に対し帝国税・軍役を負い、帝国議会に参加した帝国直属の都市のことである。なかでも、ライン、ドナウの司教都市に見られるように、都市領主の支配から自立し、広範な自治権を獲得した自治都市は自由帝国都市とよばれ、帝国税を免除されるなど、当初、一般の帝国都市以上の特権を享受した。中世後期は、これら帝国都市の数が増加した時期であり、皇帝への従属がますます名目化するや、有力な帝国都市（大都市）は周辺農村部に独自の支配領域を構築した。こうして、他の有力な封建諸侯と拮抗しうる一つの政治権力として、帝国都市の動向はドイツ国制史の展開に大きな影響を与えた。南ドイツの大都市ニュルンベルクでは、帝国を担っているのはまさに帝国都市であるとの自己意識さえ抱くに至ったのである²⁵。このように、ランデスヘル²⁶領域支配者（領邦君主）としての都市が周辺地にむけて行使した領主制的影響、および封建諸侯との緊張関係とそこで探られ

る合意・妥協などの動態的展開という点で、帝国都市の機能・役割は重要な考察対象となるのである。

こうしたドイツの動向は、いわゆる中世後期の危機をどのように克服し、再編をおこなうかという課題と、領邦レベルで密接に結びついて展開する。一四世紀半ばのドイツには有力諸侯として、七選帝侯のほか、七〇の聖界諸侯、二五の世俗諸侯が存在し、それぞれが領域政策を展開していた。また中世後期以降、ドイツは数百におよぶ大小領邦のモザイクをなしていたのみならず、質入れ、購入、相続、婚姻、横領などによって、大領邦はより大きく、小領邦はより小さくなるなど、領域の変動は頻繁であった²⁷。各地に多種多様な飛び領地、包み領地が存在し、領域支配（ランデスヘルシャフト）の統一性は欠如していた。当然ながら領邦君主の関心は、慣習や法の異なる地域を統合し、支配することにあつた。こうして一定地域において競合関係にあつた家系どうしは、相互の利害に基づき、領域支配形成をめぐって対立することになった。そうした状況において、中世後期の危機は小領邦にとつての存亡の危機であつたろう。同時に、王権、領邦君主、在地領主、都市のそれぞれの領域拡大政策にともなう利害対立も先鋭化する。とくに帝国都市による都市領邦の拡大は、周辺の有力諸侯と

の争いを必然化したであろう。市外市民の創出、すなわち都市が周辺地域の住民に法的な保護（自由）や市民権を与える慣行が、諸侯の支配下の地域住民への吸引力になったからである。このことは、離村や逃散によって諸侯の生産労働力および収入が奪われることを意味していたのである。

諸侯はこうした局面の打開策として、帝国都市と弱体化する王権との関係に目をつけた。王権側の譲歩によって帝国都市が帝国直属の地位を放棄せざるをえなくなるようにしむけることが諸侯にとって有効な戦略であった。その結果として、都市の忠誠・従属を帝国・王権から諸侯側にむけさせることができたからである。たとえば財政難の帝国が諸侯とのあいだに債務関係を生みだした場合、一都市全体、あるいは都市官職や徴税権などの個々の高権（レガリーア）が国王によって質入れされた。そして帝国が債務不履行となった場合には、抵当物件が諸侯に譲渡されたのである。国王による担保の回収を期待することは帝国の恒常的な資金不足からしてほぼ不可能であった。したがって質入れされた都市の市民には自力で担保を買いもどす必要が生じた。しかしすべての都市にそれが可能だったわけではなく、質入れによってしばしば都市は政治的独立を喪失したのである。

こうしたドイツ国制上の構造的背景のもとでは、帝国都市ないし大都市の重要度はきわめて高いといえる。領邦形成という次元での王権、諸侯、都市の相互関係を動態的に捉えることにより、ドイツ中世都市研究の新たな展開が期待できるであろう。

ここで反復を厭わず確認しておこう。都市・農村関係論に基づく「第三段階」の議論で強調されたのは、都市を封建社会の構成要素と見ること、すなわち都市と農村の密接な交流および相互依存関係、そこから見えてくる領主制的要素の都市への浸透、さらに大都市よりも中小都市こそが都市の本質を示すという姿勢である。しかし今日の領主制説が、領主制の枠組みのなかで民衆の活動を評価する余地を残すものであるなら、領主の役割を、民衆の行動力と連帯性をも十分に認め、それら下からの動向を組織化していく点に求めなければならない。

この点についての示唆を与えてくれるのが、社会構造史家ペーター・ブリックレのコムナリスムス論である。ブリックレの目的はまず、都市と農村が類似的であったとすれば、両者の基礎にどの程度共通の構造的な構成原理があるのかを明らかにすることであった。このことは都市か農

村かの扱一論を排するという点からも興味深いが、しかし「第三段階」の議論とはいささかその意味合いを異にする。

都市と農村とが構造的共通性を有し、しかもそれは大都市ではなく中小都市への評価から鮮明になるという主張が、封建制に対抗する新たな競合原理としての共同体の意義およびその主体性を前面に押しだすためになされているからである。コムナリスムス、すなわち共同体自治（共同体主義ともいう）を中心概念としたブリックレの議論において、共同体は、比較的完結した集落単位の内部において国家的機能を行使する家父の団体的・共同体的な団体であると定義され、共同体を基盤とした平民（市民・農民）の政治参加が想定されている。共同体は平民にとって社会化のための基盤であった。こうして、一三〇〇〜一八〇〇年をつらぬく共同体原理は、旧身分制社会においては平民の自律と政治的・社会的能力を向上させる生活形態として、議会主義さらに共和主義への発展を方向づけたと理解されるのである。

ブリックレの設定した構造モデルにおいては、封建制は共同体に對置され、両者は相いれないものと捉えられている。そのかぎりでは、共同体の意義を領主制の枠内に限定する視点、共同体運動を許容するような領主の積極的な役

割を評価する視点はともに否定されてしまう。ただしそこにはまだ、領主と共同体の相互の絡みあいを柔軟に検出する余地はあるだろう。しかし、政治的な自治の程度とその範囲について諸段階があることを認めつつ、自治の範囲を順次拡大していこうとする努力にこそ共同体の本質が見いだせると捉え、それを都市・農村の国家的機能の行使に求めているブリックレの論旨は、中・近世ドイツの構造的背景を見るうえで重要である。中世から近世への連続・發展的側面へのアプローチと見ることもできよう。やや極端な単純モデルにしたがっての議論には問題もあるが、いずれにせよ、ブリックレの議論を基盤として、「第三段階」の殻を破る方向性を探ることは可能であると思われる。

四 社会史研究にむけて

本稿ではこれまで、西欧中世都市研究の進展のプロセスを追うことによって、近年になって共通了解とされた事柄を確認し、そのメリットをふまえたうえで、なおそこに含まれているであろう問題点について言及してきた。それは、ドイツ中世の国制に関わる構造的な背景をふまえることによって見えてくる問題であったと思われる。最後に、中世都市研究の動向と近年盛況を呈している社会史とのあいだ

の接点について、若干の検討をしておきたい。

近年の社会史研究は、人と人との結びあう形を社会の深層を形成するものとして重視し、積極的に検討を進めてきた²⁸。中世後期についても、都市および農村の共同体から家族・親族、兄弟団・職能集団、さらに救貧制度、犯罪と刑罰、祝祭、儀礼、遺言などへと視野を広げ、さまざまな人間集団の生活のありかたや心性を社会の重要な要素として意味づける研究が目立ってきた²⁹。一九七〇年代以降のこうした動向は、従来の歴史学で主流を占めてきた概念装置を見なおすことによって、よりリアルで立体的な歴史像を構築しようとしたものと見てよいだろう。

このような社会史研究の隆盛のなかで、都市が重要な研究对象になってきたことは確かである。都市貴族、職人、若者、女性、周縁集団など都市の多様な社会集団の動向が、社会的結合や地縁的絆のありかたに位置づけられ、中世社会に独自の、あるいはさらに近世への構造転換にもつうじるような価値観や心性へのアプローチが試みられてきたといえる³⁰。しかし、これらが西欧中世都市研究の動向を反映したものであるかどうかという点では大いに疑問である。管見のかぎりでは、「第三段階」の議論で共通了解とされたい自由・自治の相対化、および共同体的要素の後退を前提

として問題設定された都市の社会史研究は、今のところ現れてはいないように思われる。「第三段階」で残された検討課題といってもよい共同体の内実を探ろうとする方向性についても、たとえば、クラス・シュライナーらによって組まれた近年のプロジェクトでは、市民は自由と自治を現実にはどのように理解し対処してきたかを、多様な同時代史料によって説明しようとしているが、そこでもほとんどが、中小都市ではなく大都市に、領主制ではなく共同体に射程がしぼられているのが現状である³¹。そのかぎりでは、領主制の枠組みはおろか、中小都市の重要性を強調する動向の意図も十分に活かされているとはいいがたい。むしろここには、共同体的要素の濃厚な大都市の存在意義を否定しえないという認識が明らかである。

社会史研究にはそもそも、都市の特徴を、分化した社会構成に求める視角が備わっている。都市が大きくなればなるほどその社会構成は複雑になり、都市の擁する人口が大きくなればなるほど、社会階層は重層化し、経済的・社会的格差も広がる。こうして社会史研究にとってはず、多様な社会集団を抱え、しかも流動性の高い大都市社会の複雑な環境こそが大きな役割を演じたであろう。社会史研究において大都市および共同体的要素が重視される理由の一

つは、中小都市および領主制的要素に見られない一種の複雑系がそこに存在しているからであると思われる。

しかしもちろん、そのことが中小都市の意義を大きく後退させるわけではない。社会史をたんなる日常生活史に終わらせないためには、都市社会に統合と再編の動きを読みとる視点が必要となる。中世後期の危機を都市社会がどのように克服していこうとし、そこから新たにどのような問題が生じたのか。こうして、都市の社会史にとつての重要な問題意識の一つとして、さまざまな管理・規制の試みに反映される秩序形成意識の解明があげられることになる。この観点は共同体原理の浸透した大都市はいうまでもなく、領主制原理の貫徹した中小都市にも有効である。また共同体の内実を問う場合に、領主制原理と共同体原理の強弱の問題としてではなく、両者の絡みあいで見えることを課題とするなら、領主と民衆のあいだの妥協・合意のありかたを中小都市の場に求めることは十分に可能である。おそらくその場合、領主・民衆間の合意・妥協の産物とされるヴァイズテューマー（判告集）が、ドイツに固有の構造的背景をも明らかにしうる史料として、貴重な分析対象となるだろう。

西欧中世都市研究の動向をふまえるなら、このように中

小都市を対象とする意義は社会史においても十分に見いだせる。しかし、成熟した共同体を基盤とした都市社会の展開に重点をおく社会史的アプローチには、大都市の複雑な社会環境が適していたのは確かであろう。重要なのは、都市の社会史研究が、共同体的要素の内実を、経済史的な枠組みをこえて、領主制原理との相互関係、社会の統合にむけた秩序形成の点から分析しようとしていることである。そしてそこに見られるような、領主制的要素と共同体的要素のあいだの緊張関係や葛藤を都市民の意識の問題から考えていこうとする姿勢は、かつて中世都市の団体意識の構造と発生形態、団体を支える市民的精神を明らかにすべく「公共世界に奉仕する個人の自主的規範的精神」に注目した増田四郎氏の問題意識にも、通底するものでありえるだろう。こうした視点はさらに、中世社会を近代とは断絶した封建社会と位置づけることによって過小評価してきた、中世から近世への連続的側面を捉えなおす方向にもつうじるものである。中世都市史研究は、社会史の成果に学びながら、たえず枠組みや視点の転換をおこないつつ、新たな問題提起をめざしているのであり、「第四段階」を確立し、共有する機はもうすでに熟している。

- (1) 明治啓三／江川溫／佐藤彰一／服部良久／早川良弥編著『西
 欧中世史(上)(中)(下)』(ミネルヴァ書房、一九九五年)、
 『岩波講座世界歴史7 ヨーロッパの誕生』(岩波書店、一
 九九八年)、『岩波講座世界歴史8 ヨーロッパの成長』(岩
 波書店、一九九八年)、近藤和彦編著『西洋世界の歴史』(山
 川出版社、一九九九年)など。
- (2) ドイツ中世の都市・農村関係をめぐる今世紀後半以降の動向
 に関しては、森本芳樹「一九六〇年以降ドイツ学界における
 中世初期都市Ⅱ農村関係に関する研究」『経済学研究』五〇
 巻五号(一九八五年)、田北廣道「一九六〇年以降東ドイツ学
 界における中世盛期・後期の都市Ⅱ農村関係に関する研究」
 (上)(下)『商学論叢』二九巻四号(一九八五年)、三〇巻二号
 (一九八五年)、同「一九六〇年以降西ドイツ学界における中
 世盛期・後期の都市Ⅱ農村関係に関する研究」(上)(中)(下)
 『商学論叢』三一巻一号(一九八六年)、三二巻一号(一九八
 七年)、三三巻三号(一九八七年)、同「ドイツ学界における
 中世盛期・後期『都市・農村関係』に関する最近の研究動向
 —林毅氏の批判に答えて—」『商学論叢』三五巻二号(一九
 九〇年)、同「都市と農村」『西欧中世史(下)』所収などを
 参照。また、近年の研究動向をふまえ、南欧における定住史
 の問題を展望したものととして、城戸照子「インカステラメン
 ト・集村化・都市」『西欧中世史(中)』所収をあげておこう。
 (3) M・ヴェーバー(世良晃志郎訳)『都市の類型学』(創文社、
 一九六四年)。
 (4) H・ビレンス(佐々木克巳訳)『中世都市』(創文社、一九七
 〇年)、同(佐々木訳)『中世都市論集』(創文社、一九八八
 年)、H・ブラーニッツ(鮎田豊之訳)『中世都市成立論』(未
 來社、一九五九年、改訂版一九九五年)、同(林毅訳)『中世
 ドイツの自治都市』(創文社、一九八三年)。
 (5) 増田四郎『歴史学概論』(講談社学術文庫、一九九四年)、同
 『西欧市民意識の形成』(講談社学術文庫、一九九五年)、同
 『社会史への道』(日本エディタースクール出版部、一九八
 一年)などを参照。
 (6) エンネンの見解については、E・エンネン(佐々木克巳訳)
 『ヨーロッパの中世都市』(岩波書店、一九八七年)を参照。
 一九七〇年代後半の来日講演の内容については、同(魚住昌
 良訳)『ドイツにおける都市史研究の現状 —組織・テーマ
 ・方法—』『西洋史学』一一〇号(一九七八年)などを参照。
 (7) 日本における研究としては、林毅『ドイツ中世都市法の研究』
 (創文社、一九七二年)、同『ドイツ中世都市と都市法』(創
 文社、一九八〇年)、同『西洋中世都市の自由と自治』(敬文

堂、一九八六年）、同『西洋中世自治都市と都市法』（敬文堂、一九九一年）、同『ドイツ中世自治都市の諸問題』（敬文堂、一九九七年）、小倉欣一「中世都市フランクフルトの成立と市民の自由」仲手川良雄編著『ヨーロッパ的自由の歴史』（南窓社、一九九二年）、森田安一『スイス中世都市史研究』（山川出版社、一九九一年）などがあげられる。ほかに鯖田豊之『ヨーロッパ封建都市』（講談社学術文庫、一九九四年）を参照。

(8) シュルツによ「てはじめてミニステリアーレンと都市とを結びつけて捉える見方が示されたといつてよい。Schulz, K., Die Ministerialität als Problem der Stadtgeschichte — Einige allgemeine Bemerkungen. erläutert am Beispiel der Stadt Worms. in: *Rheinische Vierteljahrsblätter* 32 (1968), S. 184-219; id., Die Ministerialität in rheinischen Bischofsstädten. in: Maschke, E./Sydow, J. (Hg.), *Stadt und Ministerialität*. Stuttgart, 1973, S. 16-42 など。シュルツの見解をいち早く精力的に日本に紹介したのは魚住昌良氏である。魚住昌良「中世都市におけるミニステリアール層——シュルツ学説を中心として」『山梨大学教育学部紀要』五号（一九七四年）、同『ドイツ中世都市史研究における司教都市』『国際基督教大学社会科学ジャーナ

ル』一三号（一九七五年）、同「中世都市とミニステリアール層——シュトラースブルクの場合」『津田塾大学紀要』八号（一九七六年）などを参照。

(9) シュルツ説にいち早く異議を唱えたのはヨーゼフ・フレッケンシュタインである。彼はミニステリアーレンの都市における主導的役割を否定する立場であるが、ミニステリアーレン出身の者が都市共同体の指導層を形成した場合でも、それはミニステリアーレンとしてではなく市民としてであつたと主張する。Fleckenstein, J., Die Problematik von Ministerialität und Stadt im Spiegel Freiburger und Strassburger Quellen. in: *Stadt und Ministerialität*, S. 1-15. その他の研究者の議論については、相澤隆「ドイツ中世都市と家人層——ライン河以東の諸都市の場合」、『史学雑誌』九二巻六号（一九八三年）を参照。日本では、概ねミニステリアーレンの主導的役割を認めたくうえで、シュルツ説に対して批判的検討がなされた。木村豊「ケルン大司教領の家人制——家産制的主従関係の一研究」、『北大文学部紀要』三〇巻二号（一九八二年）、櫻井利夫「ドイツ中世都市におけるミニステリアーレン層——クヌート・シュルツ説の批判的検討」、『法学』四六巻五号（一九八二年）、佐藤専次「中世都市フライブルク・イム・ブライスガウとミニステリアーレン層」

『西洋史学』一五〇号(一九八八年)など。

- (10) シュルツ説を都市・農村の共生という観点から高く評価したのがアルフレッド・ハーフェアカンプである。Haverkamp, A., Die "Frühbürgerliche" Welt im hohen und späteren Mittelalter — Landesgeschichte und Geschichte der städtischen Gesellschaft. in: *Historische Zeitschrift* 221 (1975), S. 571-602. 以下はとくに S. 587ff. ミュンステリアーレンの役割を重視する立場は、瀬原義生「ヨーロッパ中世都市の起源と支配権力」『歴史学研究』四七一号(一九七九年)、同『ヨーロッパ中世都市の起源』(未來社、一九九三年)などにも見られる。

- (11) 註(2)のほかに、森本芳樹編訳『西欧中世における都市と農村』(九州大学出版会、一九八七年)、同編著『西欧中世における都市—農村関係の研究』(九州大学出版会、一九八八年)を参照。

- (12) 中心地理論については Haverkamp, a. a. O., S. 599ff. の他に、田北前掲諸論文および、同「中世都市史の研究方法としての『中心地』論の意義と限界——ドイツ学界を中心に」『商学論叢』三三卷三号(一九八七年)を参照。

- (13) ヨーロッパ都市コミュニケーション論を総括したシュルツの近著において、この点が強調されている。Schulz, K., "Denn sie lieben

die Freiheit so sehr..." Darmstadt, 1992, S. 275ff.

- (14) R・キースリング(田北廣道訳)「中世後期における都市—農村関係——特に南ドイツの例による最近の業績を手掛りとした問題提起と方法についての考察」森本編訳前掲書所収、および田北前掲諸論文を参照。

- (15) 当初より、法制史の立場から古典学説の価値を強調してきたのが林毅氏である。林前掲諸書を参照。また、同「西洋中世都市法と慣習法——比較都市法史研究のために」『大阪経済法科大学法学論集』四四号(一九九九年)では、都市と農村の比較の観点から、古典学説およびドイツの大都市の意義を強調している。

- (16) 江川温「概説 成長と飽和」『西欧中世史(中)』所収、同「ヨーロッパの成長」『岩波講座世界歴史8』所収、同「中世ヨーロッパ世界」『西洋世界の歴史』所収。

- (17) Reynolds, S., *Kingdoms and Communities in Western Europe, 900-1300*. Oxford/New York/Toronto, 1984. 江川温「ソム・アビリティと支配の構造——スーザン・レナルズの中世社会論」二宮宏之編『結びあうたち』(山川出版社、一九九五年)を参照。

- (18) 森本前掲編著書、xページ。

- (19) そうした認識についてはたとえば、森本芳樹「西欧中世初期

共同体論の可能性」比較都市史研究会編「都市と共同体(上)」

- (名著出版、一九九一年、二ページ、斎藤綱子「西欧中世慣習法文書の研究」(九州大学出版会、一九九二年)、二五七ページなどを参照。またすでに神寶秀夫氏はヘルシャフトとゲノッセンシャフトの絡み合いを念頭においた一連の研究成果を発表している。神寶秀夫「一四世紀中葉自由都市マインツにおける都市参事会支配の構造」『史学雑誌』八五巻四号(一九七六年)、同「一五世紀自由都市マインツにおける都市君主権の構造」『法制史研究』二七号(一九七八年)、同「自由帝国都市マインツの統治構造におけるツンフト」佐藤伊久男編著『ヨーロッパにおける統一的諸権力の構造と展開』創文社、一九九四年)。

- (20) 服部良久「ドイツ中世都市研究の現状と課題」『歴史評論』三二六号(一九七七年)。

- (21) Schwind, M., Die Territorien im späten Mittelalter. in: Pleticha, H. (Hg.), *Deutsche Geschichte*, Bd. 3, Gutersloh, 1998, S. 60ff. やらに' 西川洋一「初期シュタウフェン朝」成瀬治/山田欣吾/木村靖二編『世界歴史大系 ドイツ史』(山川出版社、一九九七年)二三二ページ以下も参照。

- (22) K・シュルツ「ザリエル朝後期およびシュタウフェル朝時代の王権と諸侯と都市——ドイツ都市参事会制度の成立をめぐ

って」『社会経済史学』四五巻二号(一九七九年)もあわせて参照。

- (23) Die Chroniken der deutschen Städte vom 14. bis ins 16. Jahrhundert, Bd. 10, Leipzig, 1872, Göttingen, 1961, S. 175. 上の点についてやらに' Schmidt, H., *Die deutschen Städtechroniken als Spiegel des bürgerlichen Selbstverständnisses im Spätmittelalter*, Göttingen, 1958, S. 39ff. および 瀬原義生「ドイツ中世都市の歴史的展開」(未來社、一九九八年)、五八二ページ以下を参照。

- (24) Schwind, a. a. O., S. 63f. 池谷文夫「ドイツと中欧」『世界歴史大系 ドイツ史』二三九ページ以下も参照。

- (25) Roedig, Ch., Städte und Städtebunde. in: *Deutsche Geschichte*, Bd. 3, S. 79.

- (26) Roedig, a. a. O., S. 79f.

- (27) フリッケルの議論については' Blickle, P., Kommunalismus, Parlamentarismus, Republikanismus. in: *Historische Zeitschrift* 242(1986), S. 529-556; id., Kommunalismus, Begriffsbildung in heuristischer Absicht. in: id. (Hg.), *Landgemeinde und Stadtgemeinde in Mitteleuropa*, München, 1991, S. 5-38. やらに' P・フリッケル(前掲良爾・田中真造訳)『一五二五年の革命』(刀水書房、一九八八年)、同(服

部良久訳)『ドイツの臣民』(ミネルヴァ書房、一九九〇年)を参照。

- (28) 日本においては、二宮宏之氏をその先鋒に据えることができるであろう。二宮宏之『歴史学再考』(日本エディタースクール出版部、一九九四年)、同編著『深層のヨーロッパ』(山川出版社、一九九〇年)などを参照。

- (29) こうした動向については、河原温『中世ヨーロッパの都市世界』(山川出版社、一九九六年)などを参照。

- (30) 多様な社会集団の動向を先駆的に考察したのはエーリヒ・マシュケである。その業績については、Masche, E.: *Städte und Menschen*. Wiesbaden. 1980. 所収の諸論考を参照。日本における社会史研究の先駆者はいうまでもなく阿部謹也氏である。その多数の著作を参照。さらに、中村賢二郎編『都市の社会史』(ミネルヴァ書房、一九八三年)、同編『歴史のなかの都市』(ミネルヴァ書房、一九八六年)なども参照。

- (31) Schreiner, K./Meier, U. (Hg.), *Stadtregiment und Bürgerfreiheit*, Göttingen. 1994. (11)で扱われているのは、フィレンツェ、ケルン、アウクスブルク、ニュルンベルクといった大都市である。

- (32) 日本でも、椋川一朗、山田欣吾、斎藤泰各氏らによってすでに実証研究がなされている。ヴァイズテューマー研究の動向

と意義をドイツ史の構造的背景に位置づけた論考として、服部良久「ヴァイズテューマー研究の課題」『史林』六五巻一(一九八二年)があげられる。

- (33) その指標として、これまで筆者は「公共の福利」および「名譽」の観念に注目してきた。田中俊之「ドイツ中世都市における『公共の福利』理念」『史林』七六巻六号(一九九三年)、同「中世末期ドイツ都市共同体と周縁集団——娼婦の存在形態を中心に」前川和也編著『ステイタスと職業』(ミネルヴァ書房、一九九七年)、同「中世後期ニュルンベルクの都市貴族と『名譽』」『史林』八〇巻六号(一九九七年)。

(金沢市浦波二一七—二〇 A—七)